

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

## 第44号

毎月発行

創刊2016年(平成28年)1月16日 土曜日

2016年(平成28年)1月16日 土曜日

## 5年目の夢 新たな出発のための「別れの儀式」 遠野物語99話を創作能に!

### 5年目に於いて犠牲者との別れを実現しよう

まずは、新年号にあたっての宣言として、いままでの路線と一線を画し、遠慮がちだったこれまでの方針を撤回し、大胆に、本音ベースの記事を書いて行こうと思う。

これまででは切り込み方に多少遠慮があったことは否めない。被災地や被災者の方々の心中を思いやると、部外者の身でありながら、遠慮なく思うところを述べるといふことをいささか控えざるを得ず、自主的にブレーキをかけてきた。

そんなことで、今後は、復興遅れを取り戻そうとか、ふさわしいリーダーが不在であるとか、忘れ去られていくとかいう論評は、極力掲載しないということになる。同じことを何度も書いても何の役にも立たない。

また、想定される読者の最大公約数的な意見を書いても誰も興味を示さず、結果、新聞は読まれないことになる。

ならば、大胆に、誰も書かないようなことを書いて行こうと思う。それがこの新聞の存在意義でもあると信ずる。

では果たして、5年目の新たなアプローチとは何か。

5年目にしようやく、犠牲者たちとの本当の別れを実現しよう、という呼びかけである。これを大震災から5年目の今年の夢としたい。

### 別れが済んでいない

この大震災での犠牲者の方々の別れが済んでいないと言ったら、ご遺族から犠牲者のご遺体が見つかったも見つからなくても、葬儀はとくに済んでいると言われるかもしれない。

しかし、本当に心の奥底からの別れが済んでいるだろうか。

また、犠牲者のご遺族の方々による葬儀は済んでいるが、あのときは、ご遺族以外の被災地住民、それ以外の東北の住民、そして全国民が驚き、悲しみ、その後も体内に重いしこりを抱えたままに重いしこりを抱えて一度思い起こそう。

そのため、まずは、身内に犠牲となった方々がいない国民のための「別れ」を実現しよう。それなしには「前進」ができないと思う。



能の様子

それから、ご遺族たちによる葬儀だけで十分かという疑問がずっと残っている。未曾有の大災害の弇いはいは、オリジナルな弇いの形を創出するのが自然な感じがする。長年に亘って弱体化し、半ば空洞化したつづつある既存宗教の枠内に、あの災害にまつわる「別れ」を無理やり押し込める必要はないと思うのである。

### 別れの形と新たな出発

この大震災での多くの死は突然であり、残された遺族たちは、あれ以来、あの場所、あの時間に立ちすくんだままであると思う。

一時、被災地に幽霊が出たという話を聞きつけると、遺族がその場に押し寄せたという話も出たほどである。唐突な死は、残されたものにとつて、いつまでも続く拷問のようである。

遺族たちは、死者への一方的な思いを何度も反芻がどうだったのかという後悔で苦しみ続ける。

5年目に於いて、死者たちを呼び戻し、あらためて「対話」することが不可避であり、そうした機会がない限り、残された遺族も国民も、新たな出発ができない。

本来であれば、これは既存宗教に所属する宗教者たちが担うべき課題である。しかし残念ながら、ボランティアとして活動はしたが、「宗教者」としてこの問題について真正面から遺族たちと対面したという話は耳にしない。

筆者は、この新聞でも、新聞を離れたところでも、以前からずっと主張し続けてきたことがある。それは遠野物語九十九話を創作能にして、これを東北大震災の弇いの儀式にしようということである。遠野物語九十九話の原文は下記に示したが、この話は、今般の東北大震災の話ではなく、百年以上前の「明治三陸地震津波」(明治29年)の話である。東北大震災はまだ生々しすぎて、芸術の域に昇華されていらない。他方、九十九話は、生々しさを失ってはいるが、犠牲者と遺族の悲しく、せつない思いは十二分に伝わり、多くの人の共感を得やすいだろう。この点で、「明治三陸地震津波」の方がふさわしい。この話の中には、死者と遺族の生々しく、せつない対話があり、東北大震災の生々しい現実とダブルことだろう。

### 遠野物語九十九話を創作能に仕立てる

能は死者の舞であるといわれる。死者として、大震災の犠牲者たちが、創作能のなかで、残された遺族や他の人々に語りかけてくる芸術形式として、これ以上のものはあるまい。遺族も、犠牲者

たちがどんな思いで死んでいったのか、そしていまだんな思いでいるのかを知りたいと思っている。実際の犠牲者たちではなく、遠野物語の登場人物たちが、それを語りかけてくれるはずだ。日本人は、古来、亡くなった人との語らいのなかで弇いを行ってきたと思う。そうしたことで創作能という形がびつたりである。

### 東北の郷土芸能の演目のひとつに

これまで当新聞で何度も取り上げてきているが、東北には、各地の神社・仏閣に付属する郷土芸能がたくさんある。特に三陸の被災地では、失われたことで、あるいは復活するなかで、そうした多くの郷土芸能の存在が初めて明らかになったという経緯がある。

そのなかには、さまざまな演目がある神楽があり、鹿踊があり、鬼剣舞などがある。遠野物語九十九話の創作能も、その郷土芸能の演目に加えられれば、わざわざ創作能単独の分野を作るより、びつたりとした位置に収まるかもしれない。

さらに、プロの創作能作家による創作能とプロの能楽師たちによる演舞ももちろんいいが、東北の郷土芸能のように、アマチュアによる創作能と演舞があつてもよい。

## 遠野物語 99 話 原文

「土淵村の助役北川清といふ人の家は字火石(ひいし)にあり。代々の山臥(やまぶし)にて祖父は正福院といひ、学者にて著作多く、村のために尽くしたる人なり。清の弟に福二といふ人は海岸の田の浜へ婿に行きたるが、先年の大海嘯(おほつなみ)に遭ひて妻と子を失ひ、生き残りたる二人の子と共に元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に便所に起き出しが、遠く離れたる所にありて行く道も浪の打つ渚なり。霧の布きたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女はまさしく亡くなりしが妻なり。思はずその跡をつけて、はるばると船越村の方へ行く崎の洞ある所まで追ひ行き、名を呼びたるに、振り返りてにこと笑ひたり。男はと見ればこれも同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互ひに深く心を通はさせたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありといふに、子供は可愛くはないのかといへば、女は少しく顔の色を変へて泣きたり。死したる人と物言ふとは思はれずして、悲しく情けなくなりたれば足元を見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山陰を廻り見えずなりたり。追ひかけて見たりしがふと死したる者なりと心付き、夜明まで道中(みちなか)に立ちて考へ、朝になりて帰りたり。その後久しく煩ひたりといへり。」

場所も、都市部にある公施設も良いが、被災地域にある神社・仏閣がよりふさわしい。その場合には、被災地域での弇いということにもつながる。いづれにしても、5年目にしようやく、大震災の死者たちとの心からの対話が求められていると思うのである。

# 三陸の地酒・海産物拡販提言 東北の地酒を起点にした観光事業 地酒は一度味わわせるところが勝負 従来の東北の殻を打ち破るための提言



新潟越後の酒蔵(93蔵)が全て利き酒できる場所—  
『ほんしゅ館』越後湯沢店の日本酒ラインアップ



館内風景

『伊達セブン』という酒を知っていますか？  
筆者は大の日本酒好きで

ある。それも震災以来、ほぼ東北の日本酒が専門である。  
また、ボランティアで行っている三陸酒海産物の渋谷開催と日本橋開催でも、三陸にはじまり、現在では東北全県の日本酒を参加者のみなさんに味わっていただいている。おかげで東北の日本酒には大分詳しくなつた。

最近では、東京駅で懇意にしている秋田の酒専門カウターバーにはたびたびおじゃまする。そこで最近聞いた話がある。  
宮城県内にある七つの酒蔵が共同で『伊達セブン(DATE SEVEN)』という酒を作つたという。残念ながら筆者はまだ飲んだことがないが美味しらしい。

近いうち、その秋田の酒専門店に『伊達セブン』関係者が、仙台でカウターバーを出すのに伴い研修に来るといふ。ぜひ会ってみたいと思う。  
いまから五年ほど前、秋田の新政酒造が中心となつて仕込んだ『NEXT5』という酒があるが、このコンセプトに真正面から挑んだ格好である。

この『NEXT5』は非常に人気が高く、その影響もあつて、秋田の酒の全国的人気に火がついた。特に若い人に人気があるのが特徴である。  
日本酒の低迷が言われて久しいが、若い人が日本酒を好きになつてくれたら、日本酒の未来に光明が見えてくる。

東北の日本酒のうまさ  
と販売面の弱さ  
東北の日本酒のうまさは広く知られており、あらためてここで言う必要もない。  
しかし販売面では、他の地方の酒に大いに遅れをとっている。それはなぜか。  
つまり、積極的なPRが不足しているからである。PRといつても新聞やテレビで宣伝するというのではない。

すでに全国的に有名になつた日本酒なら別だが、日本酒は一度味わつてみなければ、好きか嫌いか分からない。  
日本酒道入門をしたばかりの筆者ではあるが、日本酒にはさまざまな味わいがあり、それを詳細に人に伝えるのは必ずしも簡単なことではない。ひと口飲んでみるのが一番の近道である。

つまり、筆者が主張したいPRとは、東北の日本酒を、潜在的な顧客に、何らかの方法で一度味わわせてみることである。  
良いものは良いのであり、わざわざ宣伝することもないといふのは古い、意固地な姿勢である。もつと積極的に東北の酒を味わつてもらふ機会を増やさなくてはならないと痛切に思う。

た先例に学び、アレンジし、またオリジナルな手法を次々に打ち出す必要があると思うのである。  
遠慮などしている場合ではない。これまで十分に遠慮しすぎたせいで、東北の日本酒市場は下降し、他県に市場を奪われているのである。少々なりふり構わぬやり方で、すぐ実施してみようか。

そして東北に新しい観光客を呼ぼうではないか。同時に、最大消費地である大都市圏で、日本酒をキーにした東北物産活性化も図ろうではないか。

## 東北の酒の具体的なPR

この二つの例からも、東北の日本酒PRの具体的な手法がすぐ浮かぶ。他県と同じ手法を後追いつけるものかどうか迷っている場合ではない。  
周知のように、日本酒市場は長期低迷が続いている。その方向を変え、人気商品に変え、市場を再活性化していくには並大抵の努力とエネルギーではない。

## 東北の酒PRの提案

まず、東北版の『ほんしゅ館』を少なくとも、東北六県の県庁所在地の駅ビル内に設定してみよう。  
次は、大都市圏へも進出してみよう。  
できれば、『ほんしゅ館』で飲める量より多いようなカウターバーも近くに作る。

## 酒好き人口増大策

前述の秋田の新政酒造の酒に若いファンが増えていくという話をしたが、まだまだ少数である。現在の熟年層の日本酒ファンを取り

そうすれば、東北への観光客となり、また東北日本酒のボランティア宣伝員にもなってくれるかもしれない。

一度日本酒を味わう機会を提供して、ファンとなり、ゆくゆく固定客となつたら海外での口コミで、東北の日本酒が人気となるかもしれない。  
現在、円安効果もあつて外国人観光客が増加している。彼らに対して、旅行に出る前に、あらゆる手段を使って、東北の日本酒を宣伝しよう。



人気ランキングの英文表記



利き酒コーナーおすすめの酒ランキング



牡蠣の家入り口



焼きたて牡蠣

「かき小屋」が今年もオープンした。牡蠣好きにはたまらない企画である。場所は東京大手町の東京サンケイビル1F。今年は1/9(土)〜4/3(日)の日程で行われる。宮城各地の旬の牡蠣が東京に集うフェアで「宮城牡蠣の家(や)」。

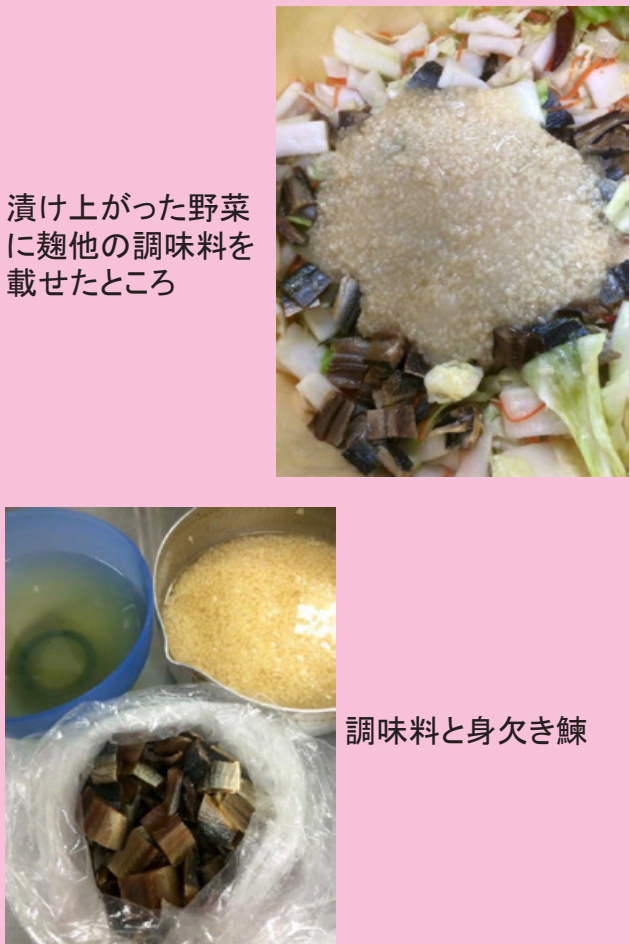
**「宮城牡蠣の家(や)」オープン**  
**1/9 ~ 4/30 昨年が続いての開催**  
**宮城各地の牡蠣が東京に集うフェア**  
**去年は新たな出会いがあったイベント**

県自慢のプレミアムブランド牡蠣たちを食べ比べられ、結果的に、東京に居ながらにして間接的に宮城の水産業復興支援にもつながるというイベント。筆者も食べ応えある特大の牡蠣を堪能した。昨年の当イベントでは、入り口で出会った関係者が、

筆者の高校の後輩で、宮城県職員と判明し、その後、牡蠣を食べつつ復興談義をした。そうした思い出深いイベントでもある。主催・宮城県 協賛・宮城県漁協協同組合 キリンビールマーケティング株式会社



宮城産ブランド牡蠣ラインアップ



漬け上がった野菜に麴他の調味料を載せたところ

調味料と身欠き鯨

**第17回 水産業再興のための料理レシピ紹介**  
**【にしん漬け】**



にしん漬け 完成品



郷土料理愛好家 松本由美子氏

**【材料と作り方】**

**にしん漬け材料**～ 総重量約 10キロ超 (内訳) キャベツ 3.5キロ (ざく切り) 大根 6キロ (短冊) 人参 400g (千切り) 生姜 300g (千切り) 鷹のツメ1パック 重さの2.2%の塩

\* 野菜を合わせ、一晚漬けます。米麴 1袋 (ぬるま湯でひたひたぐらいに蒸らす)

砂糖 500g

\* 蒸らした米麴と砂糖を合わせておく

\* 合わせ酢 酢 500・ 焼酎 120CC 身欠き鯨 500g (カット) + 焼酎 100CC

\* 鯨はヌカ水で3～4時間戻しカットする。焼酎をふり、ナイロン袋に入れ軽く揉み、真空にして一晚冷蔵庫に寝かせます

**作り方～**

①翌日、漬け込んだ野菜の出水は1/2だけ残す。②漬けた野菜に米麴、合わせ酢、身欠き鯨を入れてよく混ぜます。③最後に残した水を入れて樽で漬け込みます。④そのままにして、翌日重石を野菜と同じ重量のものをのせます。⑤寒い戸外に置きます。5日目くらいから、食べれます。水があがったら、石は軽いのと交換してよいです。10日あたりは、最高に麴の旨味が美味しくなります。

# 雑穀王国・東北

## 雑穀とは

昨年3月に発行された本紙34号で、東北の伝統野菜について取り上げた。東北は伝統野菜の宝庫で、その種類は少なくとも300を超えていることなどを紹介した。今回は野菜ではなく、穀物について取り上げたい。穀物の中でも、いわゆる「雑穀」についてである。

そもそも穀物とは、植物から得られる食材の一つで、でんぷん質を主体とする種子を食用とするものと定義されている。この穀物には大きく分けて、「主穀」、「雑穀」、「擬穀」、「菽穀(しゆくく)」の4つがある。「主穀」というのは、イネ科の作物のうち、米、麦、トウモロコシのことである。一方、「雑穀」はイネ科の作物の中で主穀よりも小さい実をつけるヒエ、アワ、キ

などの総称である。「擬穀」はイネ科の作物の種子と似ているソバ、アマランサス、キノアなどのことである。「菽穀」はマメ類のことである。つまり、「雑穀」は元々はヒエ、アワ、キビなどを指すわけであるが、昨今の「雑穀」という言葉の中に含まれる穀物は増加の一途を辿っている。現在では「雑穀」とは、一般的には「主穀」である米、麦、トウモロコシ以外の穀物全般を指している。さらには、米の中の黒米、赤米、緑米、麦の中の大麦やハト麦も雑穀として数えられることが多いので、主穀の中のものまで含めた穀物の総称、と言える。雑穀の普及・啓発・研究などを行っている日本雑穀協会は、雑穀を「日本人が主食以外に利用している穀物の総称」と定義している。玄米や発芽玄

## 人間と雑穀の関わり

米まで雑穀に含めている。

少し前までは、米、麦、トウモロコシが有り余るくらいある主穀全盛の中、雑穀と言え、米や麦が取れないやせた土地や寒冷な土地の代替作物、さらには米や麦が食べられない貧しい人が食べる穀物というイメージが強く、食卓に上る機会ほとんどなかった。実際、この100年間で日本の雑穀作付面積は、実に1000分の1以下になっただけである。

しかし、最近では雑穀が持つ豊富なビタミン、ミネラル、ポリフェノール、食物繊維などの栄養価などに注目が集まり、健康増進効果などが期待され、スーパーなどでも手軽に白米に混ぜて炊ける雑穀が回るようになってきている。そもそも、日本人と雑穀の関わりは古い。縄文時代中期の遺跡からヒエや大麦の種が採取されており、紀元前3000年よりも前から栽培されてきたことが明らかになっている。世界的に見ても、雑穀は現在に至るまで受け継がれてきており、雑穀の方が主食となっていた地域もある。土壌や気候条件などが不良な土地でもよく生育するため、収量は少ないものの安定した収穫が得られ、長期間の保存に耐える作物であるため、不作の年の救荒作物として

の役割があるなど、人類にとっては雑穀によって今に至るまで命を繋いできた面がある。それだけでなく雑穀は、それぞれの地域で様々な形で利用されており、地域文化とも密接に関係しているという面も見逃せない。福島県の会津地域にある日本三大虚空蔵尊の一つ、福満虚空蔵尊の門前町の名物は「粟(あわ)まんじゅう」である。現在7店が門前に軒を連ね、その味を競っている。その昔、福満虚空蔵尊のある地域に大火災が起きた折、当時の和尚が二度と災いに遭わないようにとの願いを込めてアワを使った饅頭をつくって信者に配り、それがアワを使ったお菓子として配ったのが始まりで、それ以来名物となったと言われている。アワの鮮やかな黄色と独特の食感が特徴であるが、これもまたアワが身近な存在としてあったからこそこのエピソードであろう。

## 雑穀王国・東北

この雑穀、最近とみに注目が集まり、流通量も増えているのだが、実はその9割くらいを輸入に頼っている。しかし、残りの1割のうち、大半は東北産である。最初にも書いた通り、もと「雑穀」にどの作物を含めるか含めないかで話が違ってくるのだが、農林水産省の統計では雑穀の中にトウモロコシも入っていたりして、なかなか「雑穀」の現状がどうなっているのか掴みにくい。

りして、なかなか「雑穀」の現状がどうなっているのか掴みにくい。

や古い資料だが、東北農政局が2008年にまとめた「東北における食と農の現状」によれば、アワ、キビ、ヒエ、アマランサスの雑穀4品目の2005年の全国の作付面積587haのうち、東北の作付面積は352haで全体の約60%を占める。その中でも岩手県の作付面積は304haで、東北でも頭抜けている。また、収穫量でも、全国の収穫量756tのうち、東北の収穫量は641tと、全体の実に約85%を占める。中でも岩手県の収穫量はそのうちの578tと、東北の中でも圧倒的なシェアを誇っている。

## 岩手県に見る雑穀の生産と活用

これまで見てきたように、東北の中でも岩手県が占めるシェアは圧倒的である。その岩手県内で見ると、県中央部の花巻地方がその収穫量の過半数を占め、県北部の二戸地方がそれに次ぐ収穫量となっている。

岩手県ではこのような内屈指の雑穀生産地ということの大いに自覚して、地域の重要な産業としてその振興に一丸となって取り組んでいる。具体的には、効果的な土作りや減農薬栽培の方法の普及を進めると共に、栽培から精白、加工までを一括して県内で行っている。また、在来種の保存に取り組み一方、新品種の開発も積極的に行っている。

このうち、雑穀栽培が最も盛んな花巻市では、2003年に「花巻地方水田農業ビジョン」を策定、その中で健康志向による雑穀需要の高まりや麦、大豆

の連作障害への対応を図るため、新たな推進品目として雑穀を選定した。それまでもヒエは生産してきたそうだが、それにアワ、イナキビ、ハト麦などを加えて農家と行政など関係機関が一体となって「雑穀の総合産地化」を目指した取り組みを続けてきた。

こうした取り組みがまさに実を結び、2003年以降、花巻市内における雑穀の作付けは急速に拡大し、国内最大規模の生産地となったのである。大区画圃場を活用した雑穀の機械化栽培や雑穀専用乾燥調製施設の存在に加えて、安定的な販路が確保されていることも強みとなっている。

花巻市ではもともと、米の品種改良や栽培技術の向上などがなされるまでは、伝統的にヒエやアワを栽培していた。再び雑穀が注目されたきっかけは、「平成5年冷害」、「平成の米騒動」などと呼ばれる1993年の記録的な大冷害だったという。この時の冷害を契機に中山間地域で本格的に雑穀栽培が始まり、今や他地域の追随を許さない一大産地にまでなったのである。

花巻市内においては、雑穀という地元産の食材を大切に活かそうという動きも盛んで、雑穀の食べ方を提案する市民サークルが複数結成され、また、雑穀を使った料理を提供したり加工品を販売したりする店も増

えている。行政も「雑穀料理コンクール」や「雑穀ランチコンテスト」、「雑穀スイーツコンテスト」を開催するなど、市民への雑穀の浸透とより一層の活用を促す取り組みに余念がない。こうした官民一体の取り組みが雑穀の産地としての地位の確立に功を奏したと言える。

## 東北における雑穀活用の可能性

先ほど見たように、東北は全体の60%の作付面積で全体の85%の量の雑穀を収穫している。ということは、東北は他地域よりも単位面積当たりの雑穀の収穫量が多いということになる。これは、東北の気候が雑穀栽培に適しているということも窺われる。雑穀が見直されてきている中、東北はその流れに乗って、雑穀の国内における一大産地として積極的にブランド化を図っていく必要があるのではないだろうか。

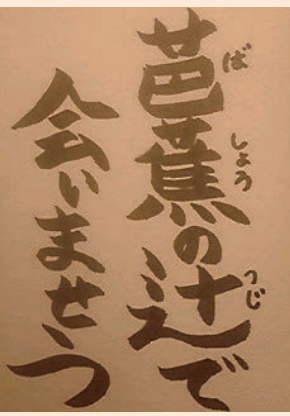
ただ、一つどうして



会津・柳津虚空蔵専門前の「香月堂」のあわまんじゅう

ことがある。かつて昭和天皇は「雑草という草はない。どの草にも名前はある」とおっしゃった、というエピソードを子供の頃に聞いたことがある。この話、今でも印象に残っているのだが、こと「雑穀」に関して、多様な形、色、香り、味を持った穀物をいろいろ引くくめて「雑」の字を冠して一まとまりに括るのは、それらの穀物に対して申し訳ない気がする。願わくば、何か別の新しい言葉にならないだろうか。例えば、「彩穀」、雑多な穀物ではなく東北の財になる穀物だということ、「財穀」など、考えてみたいと思うのである。

連載  
むかしばなし



第三十二話  
青龍の背中

無限に広がるかのような未知なる殺物が実る黄金の平原。そこへ舞い降りたのは明らかに場違いな、海の鎧武者にして極上の寿司ネタ・シャコの巨大なカリカチュアであった。

人間の拳闘士の三倍の速さとも言われるシャコの鉄拳が、宮澤賢治を襲った。「危ないっ！」

佐々木喜善が咄嗟に賢治へ体当たりし、黄金の絨毯の中へ二人が沈むと、その頭上を巨大な鉄鎌が横切った。息を飲んで見上げると、



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

怪物の左右の鎌腕がまさに拳闘士の如く、何度となく繰り返されていく。しかし、地面に向かって振り下ろされる事はなく、鎌は実った穂先より下には決して入ってこない。賢治は呟く。

「どうやら、私どもは瑞穂泥棒と目されたようですね」  
「しかし一体、どういう仕組みで浮いているのか？」  
鉄製シャコの巨体は地上七尺ほど浮いたまま、身を低くした二人の真上をゆっくり通過していく。

「風が下に向けて吹いているので、空気を何らかの力で押し出しているのかと。」  
完全に通過するかと思えたその時、機械生物の腹部が二人の真上になったところで制し、畳み込まれた無数の機械の脚が動き出して穂先の下まで降りてきた。ぎよつとした賢治は喜善の背を叩いて促し、素早く逃走を開始した。やはり穂先より背を低く保つが、機械の脚どもは腹部の下に広がって伸び、巨大シャコは二人を確実に追跡してくる。「止まりましょう、喜善さん。」

突如、そう叫んで賢治が

逃げるのを止めた。「えっ？」

「飛び乗りましょう！」  
賢治は喜善の手首を掴み、喜善にも自分のその手首を掴ませると、追い追いついてくる怪物の板状の尾部へ踊り込み、一気に腹部の背まで駆け上がった。

何とも大胆な・喜善は目が回る思いだった。自分たちの視線の高さたるや・まるで空飛ぶ船に乗ったような感覚だ。高所より見晴らしても、無限に広がるかと思われた平原の印象は変わらない。

「この殺物だけしか存在しない惑星なのだろうか？」  
賢治は呟いた。  
「まさか・これだけの収穫を食す人々がどこにいますか？」

シャコの人造の複眼が、背中にいる人間の姿を捉えた様子だが、暴れたり、腹部を奮わせたりするでもない。しかし前進するのをやめ、横、斜め後ろに無茶苦茶に動き始めたので、混乱もししくは憤怒の表明なのかも知れなかった。前脚の鉄鎌もぶんと振り回すが、全く背中には届かない。

「ここに長居する気は毛頭ありません、青龍号さん。」

賢治が突然、勝手な名前をつけてこの怪物を呼んだかと喜善は思ったが、何と頭や鎌腕の付いている胸部の後ろに、かなり大きく縦に「青龍号」と漢字で刻まれているのだ。

「ここは・・・日本??」  
「うん、いやあ・あるいは・・・」  
賢治はまるで直感に委ねるように、怪物の腹部と胸部の境に左手の親指以外の指四本を差し入れて一気に引き上げた。すると、どうだ。重たくも小気味いい機械の音をさせて、胸部の背面が丸ごと上へ開いたではないか。

人が、寝ていた。全身を見てもないボロボロな茶色の布地で包み、顔も奇妙なマスクで覆っている。男か女かわからない。そこは複雑な、やはり見た事もない、とはいえず古びた感のある無数の計器類に囲まれた狭い居住空間で、その人物は背もたれを寝かせた座席に横たわっていた。

「これは・・・操縦席？」  
しばし男二人、しげしげと珍しい機械を眺め回していたが、突如けたたましいサイレンが計器類の中から鳴り響き、途端に寝ていた人物が飛び起きた。

「なっ・何てこった!!」  
マスクの奥から聞こえたくぐもった声は、女のもののように。次の瞬間、銀色の煌きが走って、短剣が賢治たちの顔を掠めた。

「早く閉めろ!・・・つつ、早く閉めないか!!」  
「ま、待つて!こ、ここはどこなのか、教えてくれ!!」  
「放射線が・入るんだよ!閉めろよ!!」  
「放射線って・レントゲンの?」

「そうだ。強烈だぞ。ずっと浴びていると、死ぬぞ。」  
そう聞いて、賢治と喜善は顔を見合わせると、だあつと内部に飛び込み扉を閉めた。

「席は二つしかない!三人は乗れないぞ。」  
もみくちゃになりながら、賢治は訴え、問い詰める。「席はいらない、天井に張り付くから・それにしてもここはどこなんだ?君は何者で、この乗り物は何なんだ?」

ボロずくめが寝かせていた座席の背を起すと、後部座席が現れて賢治と喜善は何とどこかへ収まった。「ここは地球。それ以外、地名などは一切わからない。私は、八代前からの船でニグヴンサイドからこの星へ降りて、この畑を管理している。私、独りでな!」

驚愕と困惑で、二人は言葉が出なかった。「八代・前、とは」  
「にぐ、ぶん・さいど、とは」

その顔は見覚えのある、日本人離れした不思議な輝きの瞳・そう、麒麟に跨って飛んでいったあの謎の女、トヨの顔に他ならなかった。

名取川の北岸、郡山に集結した奥州の長弓部隊が放った矢は、霧のように頼朝の軍団の頭上に降り注いだ。矢の数は夥しく、渡し舟に乗った兵らは次々に射抜かれていく。

しかし俄か造りの渡し舟もまた甚だしく多く、船上からの応戦もまた勢い引けを取らず、徐々に長弓隊を圧倒していった。やがて一隻、また一隻と舟は北岸へ辿り着き、頼朝の兵団は各々の武器を振り上げ勇み声を合わせながら統々と上陸を始めた。

案内役の地元の老人も、頼朝らと共に上陸していた。「敵が消えましたな。郡山は西に烏鬼森を擁する、霊気降りて吹き溜まる土地。長居せずこの先の広瀬川を速やかに渡るのが最善かと。」

頼朝が馬上に戻りながら、その提案を聞き流した。「郡山は多賀城以前の陸奥国府ではなかったか。」  
「左様です。だがこの地には幾多の怪異沙汰があり、年月を経ずして国府は多賀城に移されました。」  
「ここに・わが祖、頼義が建てた八幡社があるはず。」

実は、ここ郡山の地は頼

義とその嫡男・義家が奥六郡の安倍氏を討つ際の本拠とした場所だった。幾多の困難を乗り越え長き激戦に勝利した暁、頼義は河内から勧請した平岡八幡の社をここに造営したという。

「吾は祖の業を継ぎ重なりし志を成し遂げんとする者なり。頼義公がこの地に八幡社を置いたならば、吾もまた、それに続こうぞ。」  
「何処に、築かれます。」  
「幾多の怪異、烏鬼森とかいう山の妖気の所以であらう。わしが奥羽を制したならば、その山頂に我が八幡神を奉り怪の根を絶つてくれよう。」

「いや、それは・・・」  
翁はまたしても頼朝の放言にうろたえるはめになる。郡山の平原には民家や蔵が多く散在し、大きな集落が営まれている事が明らかだった。しかし既に人の姿はなく、避難指示が徹底していた事が伺える。

「村衆は何処へ消えた・・・」  
やがて、郡山は軍団の前衛部隊で溢れかえる。「西へ向かえば烏鬼森・西北には大天狗の森があり、途中大峽谷があつて、行き着く事は叶いません。」  
「大天狗とな。後白河院を凌ぐほどの器量か。」  
「かつて古代の蝦夷の首領と地元では言われます。」  
「ほう・蝦夷か。ならば、討ち奉らねばなるまいな。」  
「な、何を仰せです・・・」

「この頼朝、全国を平定する命故、この地から夷を称する者一掃致す所存なり」  
「面白い。」  
同じく馬上にある側近が発した一言に、頼朝は訝しく感じて振り向いた。

「何奴ぞ!」  
そこにいた馬上の男は、側近ではなく、見知らぬ髭面の、山伏風の大男だった。「待たれよ、待たれよ。よくぞ我が生出森の下へお出でになられたものよ。もてなしを受けて下さるかな。」  
「一斉に武器を差し向けた兵らを冗談混じりに制止する。」

「おのれ、ふざけた輩。」  
「方々が渡つてこられた大河、これから渡ろうとなさられている大河・・・たつた今、封鎖と相成りましたぞ。」  
「なに!」  
河が封じられた・・・ここ郡山は東南北を大河に、そして西を烏鬼森に囲まれている、謂わば袋小路なのだ。「貴様・・・ここが我が祖・頼義勧請なる舞台八幡の鎮めし地と知つての亡状か!」

無数の槍先に囲まれながら、巨漢は豪胆に言い放つ。「ここは名取太郎の護りし土地。勝手に他所の神様をお招き戴いては困るべき。」  
「自ら敵地中央に飛び込む愚か者・名をば名乗れ。」  
「吾は大河太郎・兼任、生出森が頂に二十年の幽閉を経て力が有り余っているのだ。漏れなく覚悟せよ!」  
次の瞬間、ふつと兼任の

身辺に熱気が起こり、大男の首元を狙っていた数多の槍先が突然、消し飛んだ。一瞬兵団皆気を取られ、我に帰った時には兼任既に馬上になく、地に降りて身を低く群れの中を走り抜け一人また一人バツバツと打ち倒していく。

「うおお!鬼じゃ天狗じゃ」  
全く大刀打ちできる兵はなく、大河なる者、まさに鬼神の如き猛威である。「一騎当千・・・これが、真の蝦夷なのか。」  
頼朝の目はこの化外の武者の、舞い狂うような戦い振りに釘付けになっていた。まだ陽は高いはずだが、いつの間にか周囲はまたも濃い霧が立ち込め、見通しが悪くなりつつあった。

どこからか奇怪な野獣の咆哮に似た轟音が響き兵らは聞き入り目を泳がせた。霧の向こうに、二つの妖しい、紅い光が見えた気がした。空を上下するその光は、長い首の先に付いた怪物の目。龍だ。広瀬川、そして名取川上流に回り込み、頼朝の前衛軍団を完全に烏鬼森山麓へ閉じ込めた。大水の化身・藤原忠衡の飼龍が、今まさに獲物の群れを見定めていたのだ。

# シリーズ 遠野の自然 「遠野の小寒」 遠野 1000 景より



お正月



初日



SL 銀河の試運転 岩根橋 宮守間

月日の経つのがほんとに早いもので、この年末年始もあつという間に過ぎてしまいました。  
そして年が明けての一月五日は、二十四節季では「小寒」にあたります。暦の上では、寒さが最も厳しくなる時期の前半部分ですが、今年、近年の暖冬の域をはるかに超えた全国的

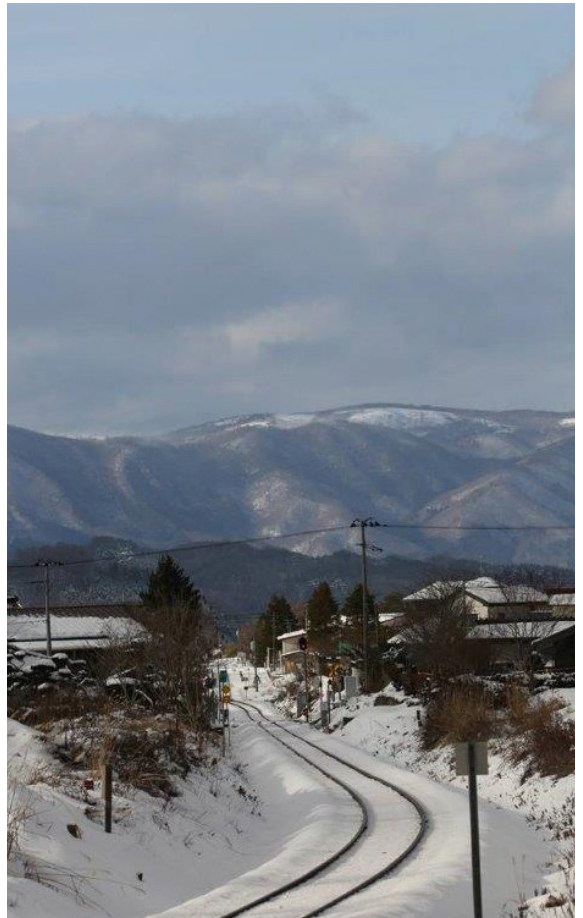
異常気象となつています。東京では数十年ぶりに、正月にもかかわらず日中の最高気温が十五度を超える春日が続きました。  
降雪量も全国的に少なく、一部のスキー場では雪が少なすぎて閉鎖になったところまで出現しました。  
筆者も、大晦日から元旦にかけて、新潟県の山間部に

ある温泉に出かけましたが、例年ならば三メートルも雪が降るといふその温泉地では、わずか数十センチしか降雪がなく、道路の境界を示す長い棒がむき出し状態となつていました。  
また、気象だけでなく、年明けから国内外の政治や経済の分野でも、大荒れの模様です。

新年早々、何か嵐の予感がする年明けとなりました。  
\*  
当然ながら、遠野の冬も例外ではありません。昨年の同じ季節の写真と見比べてみれば一目瞭然です。  
雪が少なすぎます。昨年の写真では、木々にこんもりと雪が積もっていますが、今年はそのような景色はありません。  
そんな遠野ですが、少しでも冬が感じられる写真を

選別してみました。  
\*  
まずは「お正月」の写真です。しめ縄の下からのアングルから見える雪かきをしたあとの境目がきれいです。やはり雪は少ないようです。続いての「初日」。ここでもやはりうつつらとした雪景色です。  
「SL 銀河の試運転」は、

うつつら降った雪が融けた状態でしょうか。かろうじて、「冬の鉄路」が雪らしい雪です。  
「ようこそとおのへ」も少ない雪が融けた状態です。「つらら」の三枚が、何とか遠野の冬を垣間見せる写真ですが、昨年の、いかにも冷たそうなたつらとは大分様相が異なります。



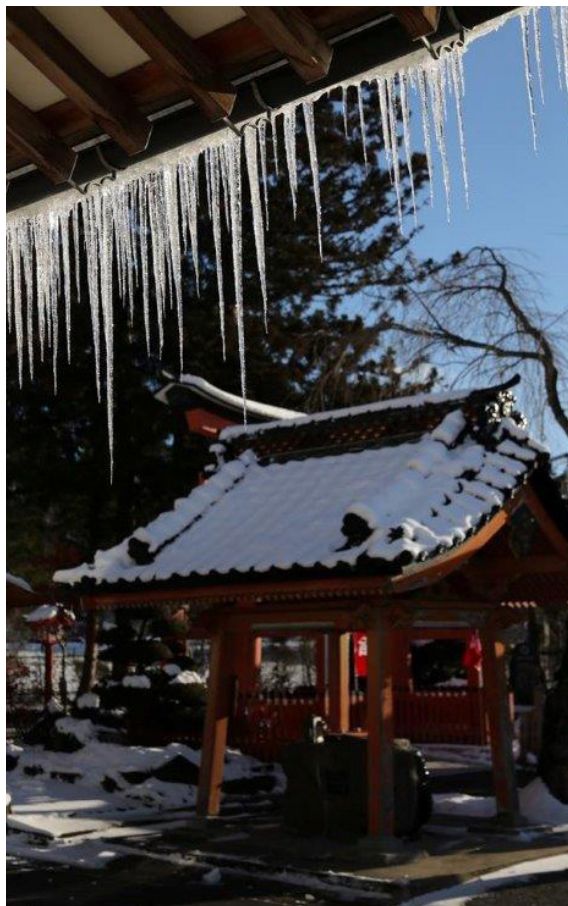
冬の鉄路



ようこそとおのへ



つらら



つらら



つらら



無農薬・自然農法の千田農園にメンバーで稲刈りに行った

## 石巻に新しい復興の風を

若者が中心となって立ち上げたNPO法人が新しい手法で風力発電所開発に挑戦する！  
-NPO法人STELAのプロジェクトのレポート4-

ローマクラブという研究者グループが無成長を前提とする経済が地球にどのような影響を及ぼすのかという報告を「成長の限界」という本にまとめて40年以上が経った。  
以後最新のデータと時代に合わせてアップデートを続けられているが結論は初版と変わっていない。  
様々なシナリオの予測は全てが経済の崩壊を予感させるものだった。  
有限の地球の中で大量消費を続ける無限成長は成り立たない。毎年GDPを増やし続ける成長は遠くない未来に崩壊しかもたらさないものである。  
唯一、今後も人類が長く発展し続けるためのシナリ

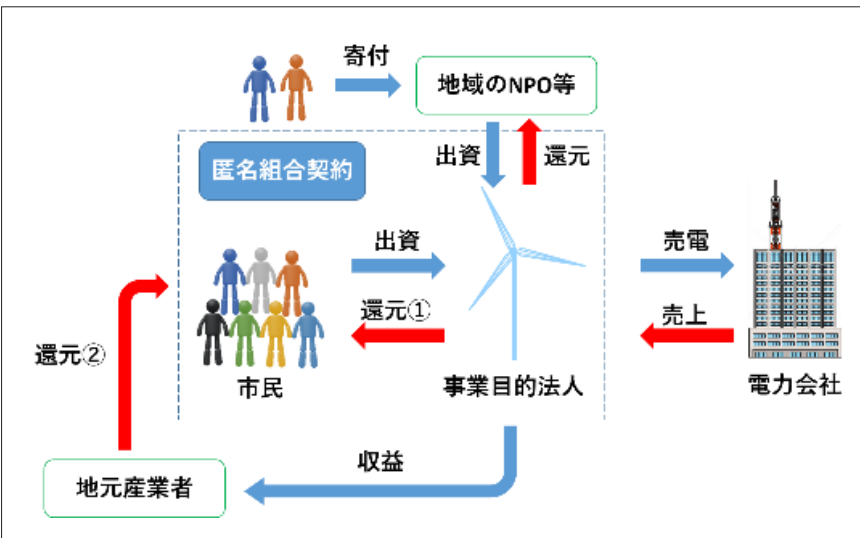
才は資源を貪り続ける経済からの脱却である。  
世界自然保護基金の報告によれば我々の地球と経済の規模は既に限界を超えており、現在で地球1.5個分の消費を行っている。

### 発電所の開発だけで十分か

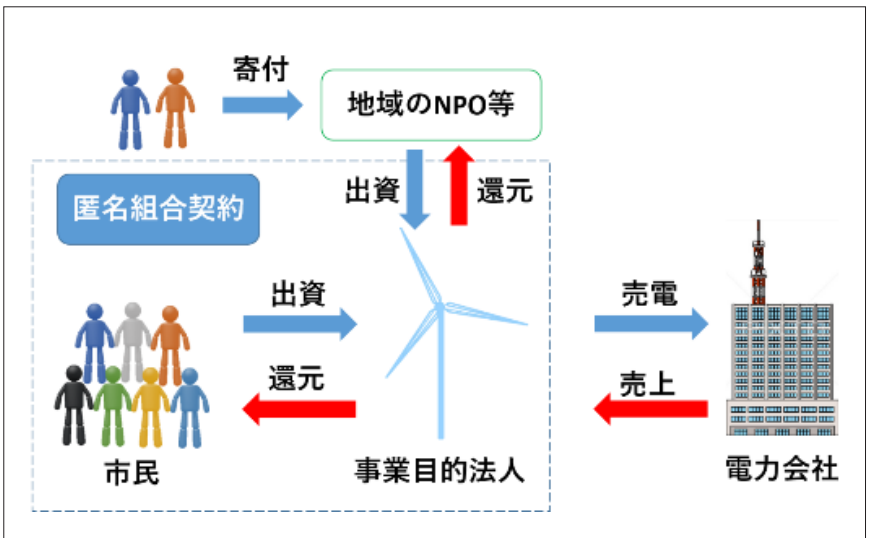
持続可能な社会という言葉は既に使い古されている言葉であるが、これからも長く発展し続けられる理想の形である。取り返しのつかない原発事故を教訓にするインディアンの子供たちが「我々は7代先の子供たちのことを考えて行動する」という言葉を思い出す。

環境問題、経済、様々なテーマで重要な局面に生きていることは確かであり、我々の行動は確実に次世代に影響を与えるのだ。

我々はどうのように動くか。事業を行う中で持続可能な社会とは発電所だけがエコならばそれでいいわけではないということに気がついた。我々が行うのはあくまで発電所開発であるが、市民出資という枠組みを少し見直すことで更なるインパクトをもてないだろうかと考えた。そこで我々のビジネスモデルでは既存の市民出資に加えてNEXT DOOR PROGRAMという還元モデルを検討することにしました。ベースとなる市民出資とその発展型、そして我々のモデルについて説明する。



地元の物産を取り入れた県産品応援型の還元モデル  
秋田県で市民出資により太陽光発電事業を営む会社が行っている



市民出資のベースとなるビジネスモデル  
パイオニアであるNPO法人北海道グリーンファンドが実施

### 市民出資のベースモデルと発展型

市民から寄付ではなく、小口の出資を多数集めて発電事業を行い、元本と収益を還元する市民出資の基礎となっているのは日本において初めて市民風車を成功させたNPO法人北海道グリーンファンドのビジネスモデルである。

代表の鈴木氏は好意で協力してくれた弁護士とともに時間をかけてこのモデルを構築した。匿名組合出資と事業目的法人(SPC)を用いた手法は多くの市民出資発電所に取り入れられている。

それ以後、様々な地域でご当地電力はじめ小さな市民発電所が誕生し、ビジネスモデルの発展型も誕生している。

一例として県産品応援型市民ファンドとして秋田県で市民出資を取り入れて太陽光発電事業を行い、その収益の還元を金銭だけではなく、出資額に応じた県産品配当を選択肢に入れることで地元の産産を応援しているモデル図を並べて示した。

市民出資で発電事業を行うという挑戦を行うには創業者だけでなくサポーターにも強い意志があつて形になつており、道を拓いた先達に心から敬意を捧げるとともに我々が今、検討しているモデルについて紹介したい。

### 元本そのものも物産還元の対象に

地元産産を応援することに加えて、有機農業や海を育みながら漁業を行う漁師間伐を行いバイオマス素材に充てる林業や材木業者。他にも様々な社会問題に向き合う社会的組織など未来をより良くしようとして動き出している方々を応援し、連携を図っていきたくと考えている。我々が検討しているのはその連携に市民出資の還元モデルを組み込むことだ。利率数パーセントの利益だけではなく、出資した元本そのものも金銭以外の物産や他団体への寄付という形で出資者に還元できるならば数パーセントから数十パーセントに文字通り桁がひとつ違う社会的なインパクトを起せるのではないだろうか。

風車一本に8億円の初期投資が必要であり、耐用年数を20年と考えれば8億円以上の社会益を金銭以外の形で生み出すことができ、20年という長期に亘つて様々な心ある産産や社会的組織を応援し続けることができる。その割合はどの程度なのかは文字通り出資者の選択に任せられる。

出資者は発電所が自然エネルギーを作り出すことに加えて次世代のために動く方々の応援が可能で、選択により物産での還元、もしくは途上国に学校ができるなど様々な社会益を生み出せるのだ。

発電事業は黒字の見通しであるから、風が良好な時は金銭での還元を還元年があつてもいい。未来のために出資というアクションを起こした出資者の厚意を次の心ある人に渡し、扉を開くという意味で、NEXT DOOR PROGRAMと呼んでいる。  
昨秋、県内で無農薬・自然農法で農家を営み、我々の活動を応援してくださっている千田農園へメンバーを募つて稲刈りに行った。このプログラム実行にはこのようなコミュニケーションが重要であり、現在は法人形成の検討が急務だが、この取り組みは産産と消費者の距離を近くし、未知数の関わりを生み出す可能性を持つと考えている。

### イベント紹介

1月30日にカンボジア支援を行う「はちどりプロジェクト」というNPO法人が都内で登山家の栗城史多氏を招いて、国際支援組織数団体とのイベントを開催することとなった。  
我々も東北支援で登壇させて頂く事になったので是非足を運んでいただけたいから幸いである。

【栗城史多×ボランティア】とインターネットで検索していただくとページが表示される。  
来月号の記事  
来月はイベントの報告と当プロジェクトに助言を下さっている専門家の紹介などを予定している。

### 寄稿者プロフィール

東梅祐也  
(とうばいゆうや)

石巻市出身。  
エンジニアを志し、石巻工業高校電気科、東北学院大学電気情報工学科、同大学大学院にて修士号を取得。現場での仕事に従事するために博士課程を中退する。

幼い頃から動物が好きで、将来は環境問題の解決に貢献できる仕事につきたかったが、徹底した現場人間のため、大学院時代に社会問題の現場を肌で感じるために環境問題・戦争・貧困をテーマに地球一周の一人旅へ。

帰国後は反原発、植林、ゴミ拾い、反戦デモにチ

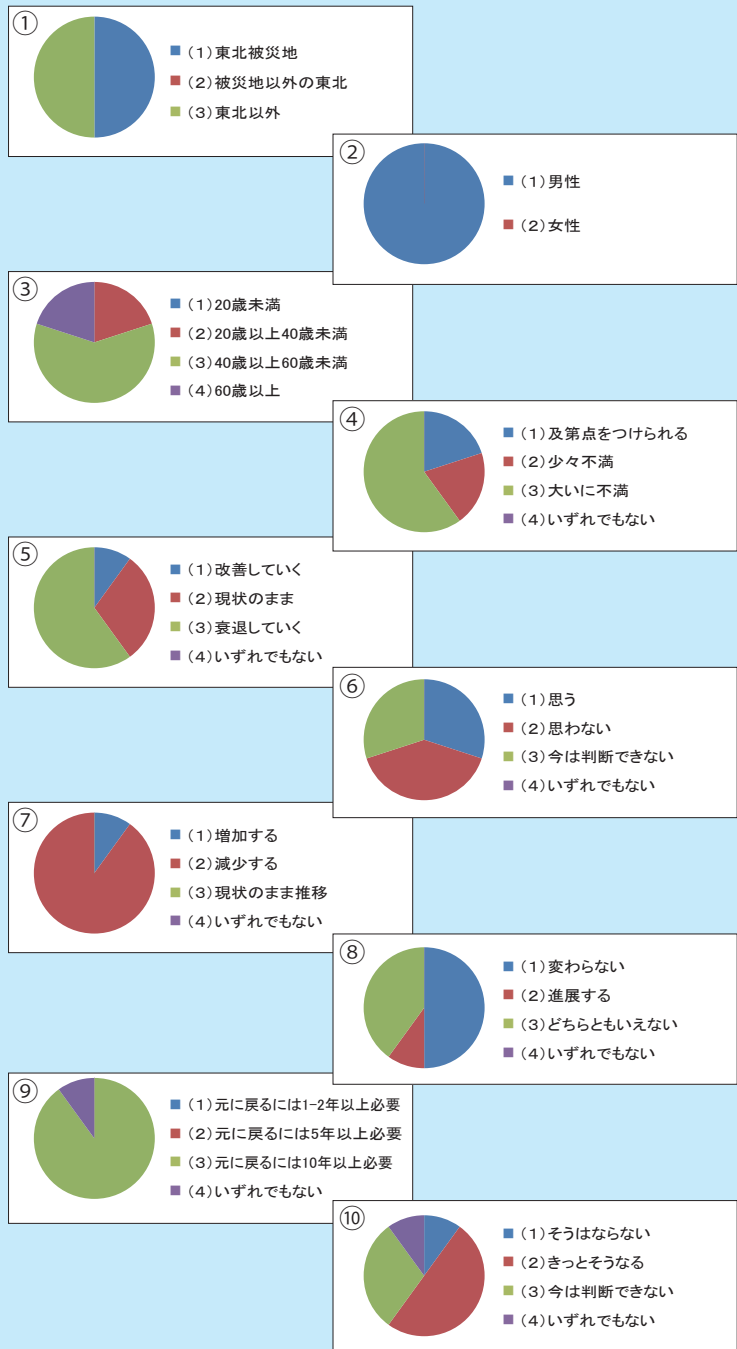


ヤリテイサンタ、自身の旅のトークライブなど様々な活動を行う。  
その後風力発電専門のエンジニアとなり、主にメンテナンステキニ従事。東日本大震災を機にエンジニアを退職してからは宮城に戻り現法人設立。現在は理事として活動している。  
発電所の管理に必要な電気主任技術者の有資格者でもある。

## 第43号 ネットアンケート集計結果

### 【5年目以降の東北復興】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	5
	(2) 被災地以外の東北	0
②	性別	
	(1) 男性	10
	(2) 女性	0
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	2
	(3) 40歳以上60歳未満	6
④	約5年の東北復興総括	
	(1) 及第点をつけられる	2
	(2) 少々不満	2
	(3) 大いに不満	6
⑤	今後の東北経済動向	
	(1) 改善していく	1
	(2) 現状のまま	3
	(3) 衰退していく	6
⑥	今後東北経済をけん引する事業創出	
	(1) 思う	3
	(2) 思わない	4
	(3) 今は判断できない	3
⑦	今後の東北人口動向	
	(1) 増加する	1
	(2) 減少する	9
	(3) 現状のまま推移	0
⑧	紛糾していた被災地住民の合意形成問題	
	(1) 変わらない	5
	(2) 進展する	1
	(3) どちらともいえない	4
⑨	被災地はいつ元に戻るか	
	(1) 元に戻るには1-2年以上必要	0
	(2) 元に戻るには5年以上必要	0
	(3) 元に戻るには10年以上必要	9
⑩	「ますます小さくなる東北」の可能性	
	(1) そうはならない	1
	(2) きっとそうなる	5
	(3) 今は判断できない	3
	(4) いずれでもない	1



今回は【5年目以降の東北復興】。早いもので、今年の3月で満5年を迎える東北震災のいままでを振り返り、今後の復興のあり方を概観するということで、少し先取りをしてこのテーマを設定した。回答者数はかなり少なく十名。

「約5年の東北復興総括」は「大いに不満」が60%、「及第点」や「少々不満」が同数で20%。「今後の東北経済動向」は「衰退」が60%、「現状のまま」が30%。「東北経済をけん引する事業が新たに創出できるか」は「思わない」が40%、「思う」と「判断できない」が同数で30%。「今後の東北人口動向」は「減少する」が圧倒的で90%。「紛糾していた被災地住民の合意形成問題」は「変わらない」が50%、「どちらともいえない」が40%。「被災地はいつ元に戻るか」は「元に戻るには10年以上必要」が圧倒的で90%。「ますます小さくなる東北」の可能性は「きっとそうなる」が50%、「判断できない」が30%で続く。

総括は非常に厳しい。特に「これまでの復興は大いに不満」、「これからの東北経済衰退予測」、「東北人口減少」、「元に戻るにはさらに10年以上必要」、結果的に「ますます小さくなる東北」という予測は厳しい。

5年目以降の復興にはかなりの方向転換と引ききつた決断が必要そうだ。

### 編集後記

大変な年明けを迎えた。国内では数十年ぶりという異常気象。正月というのに春日が続いた。世界では、政治と経済が混迷を深めている。まず中東情勢が混迷を深めている。中国の経済もこれからどうなるか世界中が注目している。アメリカのイニシアティブも揺らいでいる。ヨーロッパとの連携も揺らいでいる。そうしたところに北朝鮮の「水爆実験」である。

気がかりなのは、こうした騒動に振り回されて、今年5年目を迎える東北復興が、昨年にも増して忘れ去られるということである。人間は忘れる生き物ではあるが、この東北震災は忘れてはならないのだ。

5年目の今年からは、忘れないということに加えて、受動的な支援からの脱皮も加えよう。

この5年間で、完全とは言えないが、大分精神的に落ち着いた。ここからは、受動的な姿勢から、積極的な復興へ、他人からの支援から、自前の復興へと舵を切る必要がある。

そのためのアイデアを、当新聞もどんどん提言していくつもりである。嘆き続けていても復興は前進しないことを肝に銘じよう。

斬新な復興手法で人々の関心を呼ぶくらいにならないといけないと思う。

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先  
(郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブloid新聞【東北復興】宛  
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています